

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

キャッチボールには、投げ手と受け手が必要だ。選ばれた場所によって両者を隔てる距離は伸び縮みするのだが、やりとりを重ねるうち、たがいの肩と制球力に見合う最も適切な「間」が自然とわかってくる。このくらいの力を入れてこのくらいの角度で投げると、相手のカマエたグラブにきっちり収まるだろうとの予測を確信に読み替えて指先に託すときの、得も言われぬ快感。向き合った者の背丈や能力に応じてその感覚を微調整するのも、大きな喜びである。試合に出ても、投手や捕手でないかぎり、ボールに触れるのはせいぜい数回にすぎない。読みどおりに飛んできたときや、不測の事態に身体が反応したときの爽快さはスてがたいけれど、習いはじめたころはだれしも、できるだけながく、できるだけ多くボールに触れたいと思う。

しかし、相手がつねに見つかるとはかぎらない。約束をしていますが、なにかの拍子に反故にされたり、一対一だったはずの対話が友人同士の間関係のフィールド内で薄められたりして、ボールを握りしめたまま空しく帰途につくこともよくあった。そんなとき、あきらめきれずに向かったのが、近所の石垣である。壁の役割を果たしてくれるならなんでもいいような気もするのだが、子どもの遊びではあれ、近所のおじさんおばさんたちとの「対話」も欠かせないのだ。白い土塀を汚すわけにいかないし、漆喰がはがれてネリ土がむきだしになっている塀を壊すわけにもいかない。コンクリートのブロック塀は中が空洞で音がぼこぼこ響くから、静かな夕方以降は住人の迷惑になる。おまけに一般の囲い塀は地面とスイチョクにそそりたっているため、ボールをぶつけても直接跳ね返ってることがなく、的に当てる投げ手としての満足感を味わうことはできても、ゴロを拾い上げるだけではどこか物足りないのだった。

一方、古くからある石塀、石垣の面は微妙な仰角にソッていて、うまくするとボールは水平方向よりもうえに跳ねあがり、こちらまでノバウンドでドトドク。制球を意識してスリークオーター気味に、おなじクイキにおなじ力と角度で投げ込めば、ボールは顔の横にかかげたグラブにすっぽり収まるのだ。石の面を友人に見立てて、架空の対話を重ねていくわけである。ただし、そうした空想をユルユルしてくれる都合のいい石の壁は数にかぎりがあるので、私はだれにもその場所を教えず、こっそりかつ大胆に遊んだ。玉石を積んだものはどちらへ飛ぶかが読めないし、表面の加工もしていない自然石を不規則に組みあげた野石積みのもも、同様の理由で避ける。幼い対話を可能にしてくれる唯一の相手は、ホウケイに切った石を漢字の「品」のように規則正しく組みあげ、しかも適度な勾配が必要な切り石積み垣のみで、そのような条件を満たす石垣は、当時の行動範囲内でわずか二か所しかなかった。

そのふたつの石垣は、明らかに積まれた時代が異なっていた。比較的あたらしいほうには、石と石とのあいだにセメントが切れ目なく充填されておき、サカイメに当たったときに生じうるイレギュラーバウンドが少ない孤独な壁当てキャッチボールには最適の場所ではあったのだが、雨風にさらされた石の質感とセメントの風合いがあわず、ちぐはぐな印象がこちらのリズムを崩した。他方、古いお屋敷に使われていた石垣にはまだ野石積みと思わせる隙間が残されていて、全体のずっしりとした重みが石と石とのあいだの空隙にもしかかり、いびつさからしか生まれないたぐいの緊張感を漂わせていた。そのいびつな面に直径二十センチほどの円を想定して首尾よく投げ込めば、ボールは期待どおりの位置に戻ってくるのだった。

やがて私は、打球前の沈黙のなかで、黒い空隙とそこから顔を出している雑草の緑がつくりだす石垣の面の表情のゆたかさに魅了されていた。コンクリートの護岸壁などは、崩落防止のために水抜きパイプがあちこち差し込んであるのだが、あれははっきり言って、とても醜い。古い石垣には、下部にそういう役目を果たす隙間が巧みにもつけられており、内部に水がたまらない仕掛けになっている。職人が手間ひまかけてつくりあげた積み目の見てくれのうつくしさは、セメントで埋めたりしない隙間の、つまり遊びの上に成り立っているのだ。

歪んだ秩序を壊さないよう、私は慎重に、セットポジションでボールを投げ込んでいた。ストライクゾーンのすぐわきの亀裂から、七色に光るトカゲの頭が見えたりすると、十秒、二十秒とにらめっこをして、生きものの気配が消えた瞬間に投球に入り、鋭く腕を振り下ろす。するとボールは、まるでトカゲを追うかのように、石垣のあいだに口を開けた闇の入口に吸われてあらぬ方向へ跳ね返り、力のある打者ならば完璧なホームランになる憎らしい軌道を描いて、頭上を軽々と越えていくのだった。

(堀江敏幸「正弦曲線」による)

問一 線部AとJのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部1「一対一」だったはずの対話が友人同士の間関係のフィールド内で薄められ」とありますが、具体的にはどのようなことが起こったのですか。わかりやすく答えなさい。

問三 線部2「近所のおじさんおばさんたちとの『対話』とは、どうすることを言ったものですか。二十五字以内で答えなさい。

問四 線部3「幼い対話」とはどのようなことを言ったものですか。次の説明文の X Y に入れるのに適当な語句を、それぞれ指定された字数以内で答えなさい。

まるで X (十五字)

ように

Y (二十字)

こと。

問五 線部4「歪んだ秩序」とはどういうことを指しますか。それが分かる一文を問題文中からぬき出し、始めの五字で答えなさい。

問六 線部5「ボールは、まるであらぬ方向へ跳ね返り」とありますが、これはどういうことですか。「トカゲ」「ボール」の二語を必ず用いて、わかりやすく答えなさい。

二次の文章は、筆者が湖でカヤック（カヌーの一種）を漕いでいたときの体験を書いたものです。よく読んで、後の問いに答えなさい。

それでもようやく橋桁の所まで漕ぎついて（本当はここからが大変。湖の幅が急に広がるので。けれどまあ、何とか帰途のスタートラインに立った、という感じだろうか）、呆然とする。そのどっしりと存在感のある大きなコンクリートの二つの橋脚のそれぞれが、渦を巻いて深く波を引き寄せており、へたに近寄れば私などはコンクリートに叩きつけられるのは目に見えていた。けれど、そこを通過しないことにはどうしようもない。どこか安全なところで時間を稼ごうにも、この数時間を過ぎれば、今度は雨まで激しく降り出してしまふ。

ここでようやく、自分の置かれている状況と、（すっかり忘れていた）天気予報の「強風注意」との因果関係が分かってきた（本当に馬鹿だ。これからカヤックをやるうと思っておられる方はどうか先行する悪い見本として読んで下さい）。

それぞれの橋脚と岸辺との間は、それほど広くなく、橋脚と橋脚との間の方が幅があるぐらいだ。心理的には、橋脚と岸辺との間を、騙し騙し通りたいのだが、その幅一杯、橋脚側に斜めに渦が出来ていて流れが速すぎる。むしろ、橋脚と橋脚との間、真ん中に、細いけれども、左右どちら側にも向かわない真っ直ぐの流れがある。なんだか、モーセの出エジプトみたいだ、と頭のどこかでぼんやり思う。あれは両側に海の壁（？）がそびえたって道が現れたわけだけれど、これは、むしろ、両側が低く傾斜している。

ほとんど息を詰めるようにして渡り終える。まるで人生を象徴するような綱渡りだなあ、と感慨を深くする間もなく、また激しく風が吹いてくる。これは強風じゃなくて、連続する突風だ、と思う。こんなふうには急変する、ちょっと前までは、それでもバス釣りのボートがちらほらしていたのに、もう、どこにも一艘も見えない。さすがにエンジン付きのボートは逃げ足が速い、と感心する。これで、本当に独りだ、と思うと、思わず、よし、という気分スイッチが入る。さっきまで、春が重たい、なんて憂鬱になっていた気分が嘘のよう。目の前を、小さな青いものがさっと飛んだ。瞬間に、黄色が閃いた気がして、目を凝らすと、やはりカワセミだった。ダム湖にカワセミがいる！ それだけで勇気百倍だ。この強風の中を、まるで自暴自棄のようにまっしぐらに飛んでゆく。余程の事情があるのだろう。時期的に言って、カップリングを済ませ、卵を抱いているころだろうか、それとも、と思いを巡らせる。いやいや、あれはカワセミの常の飛び方。私が思い入れているだけだ。

（中略）

少し風が弱まったところで、いつもは近づいたことのない側の岸の方へ向かって（そこがそのとき、岸辺としては一番近かった）大急ぎで漕いでゆく。途中でまた風が激しくなる。今度は方向が違う。確かに意識的に岸辺に向かっていたのだけれど、結局、風の勢いで不可抗力のように私とボートは岸辺に追い込まれてゆく。これは、自分の力ではなくて、風に流されているのだ。それはそれで屈辱的だ。スピードに危険を感じて、本能的に岸辺とは逆、風に抗うようにしてバランスを取りながら、結果的に少しづつ岸に近づいてしまふ、という形にする。それでもみるみる岸に近づき、こちらに向かって腕を降ろしている大枝の下をくぐり、それからそれにつかまって、なんとか風が鎮まるのを待つ。力一杯つかまっていけないとバランスが崩れてひっくり返りそう。

全く自分でも呆れてしまうのだけれど、こういう状況になっても、私の目は、滅多に来ない側の岸辺の植生を一瞬スキャンしようとする。そのとき、思わず、え、と声を出してしまう。意外なものを見たのだった。必死でつかまりながら、もう一度よく見ようとすると、このときすでに、まともにも目も開けられない状況なのだ。けれど、それは、どう見ても、そこにあり得ないもののように見えた。

そうこうしているうちにようやく風が鎮まり、私は心を残しながらも、大急ぎでそこを離れる。そしてしばらくするとまた風が耳元でゴゴゴと唸りだし、思わず、風に向かって「また？」と悪態を吐き、再び最寄りの岸に避難する。

これを何度繰り返したことだろう。疲れ切った元の岸辺に辿り着いたとき、雨がポツポツと降り出し、私はボートを解体せずそのまま引き上げてくれる電動式のキャリアに心底感謝しつつ、ほうほうの体でダム湖を後にした。国道に入ると、すぐに雨が本降りになった。

それから数週間が過ぎて、私はやはり、あのとき滅多に寄らない岸辺で偶然見たものが忘れられなくて、またS湖に向かった。

前回の「春の嵐」が嘘のように麗らかな日で、陽射しは暑いぐらいだった。ウグイスはまだ少し「ケキョ」のところがかえていたが、前よりはずっと滑らかに唱っていた。

私はまっすぐあの岸辺に向かっていた。見つかるかどうか、心配だった。それは本当に、まだ、小さな芽吹きだったから。ありえない、と思っただけ、それが日本で野生ではあり得ないものだったから。あんな所に、誰かが植えたのだろうか。考えられることは、そこが昔、人の手に入った庭か何かであった、ということ。惹きつけられたのは、ダム湖になる以前の、その土地の生活の微かな息吹を感じたように思ったから。そういうものに、無性に惹かれるのだ。でも、それにしても、当時、山のてっぺんの辺りだったところだ。一体誰が？

実は私自身、十代のころ、ポケットに球根を入れて一人で近所の山を歩いていた時期があった。日当たりのいい草地を見つけては、いたずらのように球根を一つずつ埋め込んで歩く。そしてその球根の花が咲く時期に、もう一度歩いては、まるで思わぬサプライズを拾ったように喜びを集めて歩く。見つからない花もあったし、周りの雑草に埋もれて見つからないものも多かったけれど、それだけに弱々しくても無事咲いているのを見つけたときの喜びはひとしお。今はもちろん、そんな環境破壊の一種のようなことはしない。そして、同じようなことをするはずらっぱい若い人がいるとも考えにくかったが、その可能性は絶対ない、とも言い切れないではないか……。

見つかるかどうか、という私の危惧は杞憂に終わった。それは、すぐに分かった。真っ赤なチューリップ。なんと、咲いていたのだ。午後の陽射しを浴びて、満開どころか、すっかり開ききり、今にも花びらが落ちそう。ここでまた、感激と共に疑問が頭をもたげる。チューリップの場合、植えっ放しにしておいて、花が咲き続ける、ということはまずない。おしるしばかり、というように、葉っぱが少し顔を出さぐらいで終わってしまう。この花は一体何なのだろう。やはり誰かがポットか何かでここまで近づき、球根を植えたのか、それとも、岸边に花壇を作ろうという計画が挫折して、その中途半端な努力の結果、なのだろうか。記念館が開館中なら、もしかしたら何か分かったかも知れないが、記念館はずっと閉館中で、誰に訊くこともできなかった。

(梨木香歩『水辺にて』による)

*注 スキャン——見たものを読み取ること。 キャリア——自動車の荷台。

問一——線部1「自分の置かれている状況」とは、どのような状況ですか。簡潔に説明しなさい。

問二——線部2「ほとんど息を詰めるようにして渡り終える」とありますが、息を詰めなければならないのはどうしてですか。その理由を答えなさい。

問三——線部3「それだけで勇気百倍だ」とありますが、勇気が出たのはどうしてですか。その理由を自分の言葉で答えなさい。

問四——線部4「それはそれで屈辱的だ」とありますが、屈辱的でないようにするためには、ということができればよいのですか。解答らんに合わせて二十字以内で答えなさい。

問五——線部5「それ」とは何のことだったのですか。十五字以内で答えなさい。

問六——線部6「無性に惹かれる」とありますが、筆者はどのようなものに惹かれるのですか。最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

ア 人が自然のきびしさに抗って成しとげた様子を感じさせるもの。

イ 自然のままか、人の手が加わった庭か、なぞを感じさせるもの。

ウ 山のとっぺんまで手を加えようとする強い力を感じさせるもの。

エ 自然に埋もれた中に人が何か手を加えた気配を感じさせるもの。

オ ダムを築くために家を水底に沈ませた悲しみを感じさせるもの。

問七——線部7「喜びを集めて歩く」とはどのようにして歩くことですか。解答らんに合わせてわかりやすく説明しなさい。

問八——線部8「ここでまた、感激と共に疑問が頭をもたげる」とありますが、ここで新たに感じた疑問から筆者はどのようなことを確信しましたか。簡潔にまとめて答えなさい。

三 次の〔A〕・〔B〕二つの詩は、どちらも同じ作者(たのみつこ)によるものです。よく読んで、下の問いに答えなさい。

〔A〕

1 家族の中を

ひとまわりして

ちよっと疲れたけど

2 まだ

新聞

くくられて

物置に入れられたら

3 もう

新聞紙

でもね

ただの紙ではありません

まだまだ X よ

人待ち顔で

次の出番を待っている

〔B〕

4 わたし

風となかよしでした

5 さやさやと

おしゃべりしたものです

雨もお気に入りでした

洗い上げられて

いっそう

青く大きくなりました

月の光を浴びた秋

じっと耐えた冬の日々

6 今も残る雪の記憶を

あなたに届けましょう

すこしはお役に立ちますか

夏の日

竹のウチワが

思い出話する

どちらにも、 c に視点を置いている。

問一——線部1「家族の中を／ひとまわりして／ちよっと疲れた」とありますが、これはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問二——線部2「新聞」、——線部3「新聞紙」とありますが、「新聞」と「新聞紙」とではどちらがうのですか。わかりやすく説明しなさい。

問三「A」の詩の X に入れるのに適当な言葉を「B」の詩から十字以内でぬき出しなさい。

問四——線部4「わたし」とは何のことですか。次の説明文の a に入れるのに適当な言葉をそれぞれ「B」の詩からぬき出しなさい。

問五——線部5「さやさやと／おしゃべりした」とありますが、これはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問六——線部6「今も残る雪の記憶を／あなたに届けましょう」とありますが、「今も残る雪の記憶」とは何のことですか。具体的に答えなさい。

問七「A」・「B」二つの詩に見られる、作者の視点の置きかたには、どのような共通性がありますか。次の説明文の c に入る語句を自分で考えて、十五字以内で答えなさい。

問七「A」・「B」二つの詩に見られる、作者の視点の置きかたには、どのような共通性がありますか。次の説明文の c に入る語句

を自分で考えて、十五字以内で答えなさい。

どちらにも、 c に視点を置いている。

受験番号

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

問一	問六	問五	問四		問三	問二	問一				
			Y	X			J	G	D	A	
										(えた)	
								H	E	B	
								(して)	(って)	(て)	
								I	F	C	
									(く)	(り)	

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
			a			
			b			

問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二
	ながら歩くこと。			ことができればよい。		